

試験研究成果普及情報

部門	資源管理・増養殖	対象	研究
課題名：ハマグリ種苗生産における干潟中間育成時の好適環境の把握			
〔要約〕ハマグリ資源の増産に必要な人工種苗の安定供給に向けて、干潟域での中間育成における好適な生育条件を明らかにするため、天然稚貝の生息環境と中間育成時の保護効果の検討を行った。盤洲干潟の小櫃川河口周辺域での稚貝の出現傾向と、干潟域での中間育成では開始時の殻長を大型化する必要があることを明らかにした。			
キーワード	ハマグリ、稚貝、中間育成		
実施機関名	主 査	水産総合研究センター東京湾漁業研究所	
実施期間	2012年度～2014年度		

〔目的及び背景〕

東京湾のアサリ漁獲量が激減したため、漁業者からは種苗放流により漁獲が期待できるハマグリ資源の増産について強い要望が寄せられている。そこで、ハマグリ人工種苗を放流可能な殻長5mmサイズまで干潟域で中間育成する技術を開発するため、干潟域におけるハマグリ稚貝の好適な生育環境を明らかにするとともに、網袋を用いた保護効果について検討を行う。

〔成果内容〕

1 干潟域での天然稚貝の生息環境の把握

- ・平成24～25年度に小櫃川河口域の南北（図1）で生息数と殻長を調査したところ、殻長10mm以下のハマグリは南側に多く出現し、稚貝に好適な環境であると考えられた（表1）。
- ・小櫃川河口の南側では台風の通過後に分布密度の減少が見られ、波浪の影響による減耗があるものと考えられた（表2）。

2 人工種苗を用いた中間育成時の保護効果の検討

- ・平成25～26年度に、殻長1～2.6mmの人工種苗を目合500 μ mの網袋に収容し、海底面に固定して保護効果を検討した（写真1）。
- ・水温が10 $^{\circ}$ Cを下回る12月以降に生残率が低下し、中間育成開始時の殻長が1.5mmでは3月までに全て死亡したが、2.6mmでは7%の生残が見られた。

3 干潟域での中間育成では、1mm程度の小型の種苗は低温による成長停滞や波浪等の影響で減耗が激しいことが明らかになり、高い生残率と成長を得るには大型化した種苗で中間育成を開始する必要があると考えられた。

〔留意事項〕

〔普及対象地域〕

市川市、船橋市、木更津市、富津市 漁業関係者

〔行政上の措置〕

[普及状況]

[成果の概要]

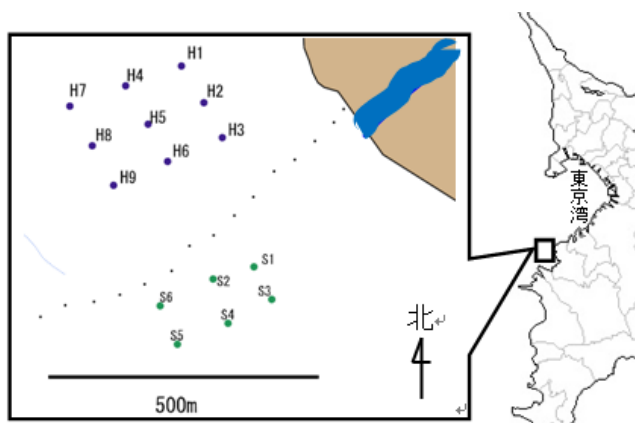


図1 調査点



写真1 干潟での稚貝中間育成

表1 平成24年度ハマグリ分布密度 (個/m²)

調査点	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	S1	S2	S3	S4	S5	S6
6/19 全個体	4	3	2	3	9	4	12	36	7						
(10 mm以下)					(1)	(1)	(1)								
7/11 全個体	6	6	8	13	9	5	26	35	20						
(10 mm以下)			(1)												
8/22 全個体	4	5	9	7	4	5	38	37	36	1	2	6	7	1	
(10 mm以下)							(1)			(1)		(5)	(3)		
9/24 全個体	3	4	5	6	7	4	33	55	23	6	2	6	5	10	
(10 mm以下)		(1)		(2)						(3)	(1)	2	(1)	(4)	
11/21 全個体	6	2	4	18	9		13	81	32	1		6	5	6	3
(10 mm以下)	(1)						(3)					(2)	(2)	(1)	
12/26 全個体	6	8	2	8	6	4	29	75	26	2	4	3	3	6	4
(10 mm以下)											(1)	(2)		(1)	

表2 平成25年度ハマグリ分布密度 (個/m²)

調査点	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	S1	S2	S3	S4	S5	S6
10/1 全個体	0	0	2	1	1	1	1	2	1	0	0	1	1	3	0
(10 mm以下)															
10/29 全個体	0	0	0	1	0	3	2	3	2	0	0	0	0	0	1
(10 mm以下)															
11/26 全個体	0	2	1	0	1	1	2	2	0	0	0	1	0	0	0
(10 mm以下)															

[発表及び関連文献]

[その他]